

コーチの本質

内山 治樹

Haruki Uchiyama: The essential role of coaches. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 58: 677-697, December, 2013

Abstract : The present study was conducted to clarify the roles of coaches in sports instruction and the essentials of these roles. Up to now, there has been no unified definition of coaching, and the conditions and grounds for selecting coaches and analyzing them collectively have remained unclear. In addition, logically, “induction” rather should be “extracted,” and the existing intelligence of the contents (intension) of the concept can be logically assumed. Accordingly, this approach seems inappropriate for revealing the essence of coaching. In order to overcome this problem, this research classifies into occasions of entities and consistence of existence. Under the subject of existence, entities theoretically transcend this through individualization, and this method is used to reach the existence of entities. As a result of this consideration, coaches first “tame” athletes to a system of physical techniques in order to address specific items, and then they endeavor to maintain the same level of play. It was clarified that coaches are specialists who are able to help athletes “transcend” from their current conditions. Moreover, coaches can using external force to compel a “physical change” in athletes, as leaders who can control athletes intelligently and actively, using a process that consists of and production based on theoretical knowledge. Thus, coaching involves the use of “compelling power” to rise from restrictions under specific conditions, and to encourage constant excellence.

Key words : leader, coaching process, compelling power

キーワード：先導者，コーチング・プロセス，強制力

I 緒 言

1. 問題の所在

20世紀後半からスポーツを取り巻く環境は劇的に変化し、それに併せて、各スポーツ種目には競技内容の専門化と精緻化に加え、競技水準の高度化が出来た。その主な原因は、競技者やチームのパフォーマンス向上に貢献したスポーツ科学の著しい発展にあったといえようが、他方で、スポーツ・コーチング（以下、コーチングと略す）が地球上の至る所で重要な役割を果たしたからでもある。アメリカでは1980年代にはすでに300万人ものスポーツ・コーチ（以下、コーチと略す）がアマチュア・スポーツを支え（Gould et al.,

1990）、近年でも、イギリスでは毎年150万人もの人々がコーチングに従事し（North, 2009）、ドイツでは公的資格を有するコーチは50万人を数え（Breuer, 2009）、750万人を超すコーチがボランティアとして日々のスポーツ活動を支えている（Nordmann and Sandner, 2009）といった事実は、そのことを実証しているであろう。そして、こうした状況は、「コーチングという学術的な分野は、様々な文化的差異を超えて注視され続けている」（Lyle and Cushion, 2010, p. 251）、といった主張が展開される際の根拠にもなっている。

しかしその一方で、われわれが看過できない由々しき事態も見受けられる。わが国では、国家のプレゼンスを高めるというスポーツ立国戦略が、つい最近「スポーツ基本計画」というかたちで具

筑波大学体育系

〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1

連絡先 内山治樹

Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574

Corresponding author uchiyama@taiiku.tsukuba.ac.jp

現化されたが、「スポーツ指導者…等トップスポーツの推進に寄与する人材の養成」は依然「施策目標」という「課題」として残されたままである(文部科学省, 2012)。また、欧州連合(EU)構成国でも、コーチング・システムやコーチング資格の再吟味のみならず、コーチの適性と資格を認定する手段を確立する必要性はますます強調されている(Bales, 2007)。そればかりか、世界中のあらゆる種目のコーチングとコーチ教育を統括する、1997年に設立された「国際コーチ教育協議会 International Council for Coach Education」がそれまでの活動の集大成として2011年に公表した「方針説明書 position paper」においてですら、「国際的にみても、コーチには未だ職業としての地位が確立されていない」(Duffy et al., 2011, p. 96)という問題意識のもと、今もなお「専門職としてのアイデンティティ」(Duffy et al., 2011, p. 106)を問い続けているのである。

今日、「コーチングとは、競技者であれ愛好家であれ、コーチによって当該スポーツに参加する者たちやチームを向上へと導くことである」(European Coaching Council, 2007)とか「競技者が成功を収める上で鍵となる要素の1つは、間違いなく競技者たちが受けるコーチングの質である」(Duffy et al., 2010, p. 27)といった言説は、世界中ではほぼ共通理解が得られるであろう。とはいえ、それらはなぜ違和感もなく受け容れられ得るのであろうか。一方、わが国ばかりか世界的にみても、なぜコーチが専門職として認知されず、自活できる環境が乏しく、資格を付与・認定する仕組みも見直すべきとされるのであろうか。さらには、かつて「コーチングに関する学術的な文献は増大したにもかかわらず、それを集約するような試みは殆ど行われていない」(Hastie, 1992)と見做された事態が、なぜ未だに「コーチングに関する研究には信頼できて体系的な分析が存在しない」(Gilbert and Trudel, 2004, p. 388)と言及される状況を克服できないのであろうか。

こうした問題が生じる理由には様々なことが挙げられようが、「コーチングの独自性や概念規定などが不明瞭とされるのは、この名辞自体に本来

的な明晰さが欠如しているからである」(Taylor and Garret, 2010, p. 101)という言明が端的に示しているように、「コーチング」概念の曖昧な蓋然性にあることだけは確かであろう。だからといって、「スポーツ種目は多種多様なので、コーチングという名辞に唯一ないし統合された意味を見出すのは難しい」(Taylor and Garret, 2010, p. 101)という指摘に同調して、「スポーツの『練習(学習)と指導』」(朝岡, 2011, p. 7)や「コーチがアスリートやチームとの間に良好な関係性を築きながら、パフォーマンスの向上に至る思考および行動の総称」(図子, 2012: 傍点は引用者)など、「コーチング」という言葉を用いて表現される対象の拡大を容認するような言明を鵜呑みにするわけにはいかない。なぜなら、それらは、「コーチング」を漠然たるかたちで既知と認めてしまった上に、この概念の内包(意味内容)を帰納的抽象でもって規定しようとする立場を採ることで、論者の私見と体験に基づく無数の「コーチング」という概念の外延(適用範囲)の拡大によって内包の抽象度の増幅とそれ自体の些少化を惹起せしめ、結局、一義的な定義づけは不可能で、逆に、不定数の定義づけを促進するものだからである^{注1)}。それ故、こうしたコーチングの定義とそれを構成する諸原理に関する全面的な見解の一致からほど遠い状況を打開するには、コーチングを基礎づける前提が改めて検討・確定されねばならないのである。その際、次の2つの言明はそのための重要な分析視点を明示していると考えられる。1つは、「コーチングを分析し理解する上で最も明らかな出発点は、コーチングとコーチとを峻別することである。これは自明で不可欠なことであるが、コーチングに関する研究はこれまでコーチを何の問題もないように扱ってきた」(Lyle, 2002, p. 39)という指摘であり、もう1つは、「コーチングはコーチによって方向づけられる」(Gilbert and Trudel, 2004, p. 389)という主張である。正に、それらは、「スポーツが産み出すあらゆるものに極めて大きな影響を与えている」(Bales, 2007, p. 94)ところのコーチに着目することこそが、上述した種々の問題を解決する

端緒と成り得ることを物語っているのである。

2. 先行研究の検討と本研究の課題

そもそもコーチに言及する研究は、1960年代後半からスポーツ科学の領域で散見できる (Abraham and Collins, 1998; Gilbert and Trudel, 2004)。また、この領域の「主要なジャーナル」^{注2)}を網羅したデータベース SPORTDiscus では、1970年から2001年までに「コーチ」という名辞を用いて公になったものは550件を超えている。

それらも含めて従前のものを概観すると、コーチの概念規定はこれまで種々行われてきていることが窺える。ただし、それらから、上述したコーチング同様、コーチとは何者なのか、という問題に対して納得のいく答えは見出せない。例えば、「技術と戦術の専門家」(Lyle, 2002, p. 64)という定義づけはこれまで一般に首肯されてきたといえる。しかし、「他の専門職からコーチを区別するという重要な課題に直面する中で、…最近の文献の広範囲に亙る分析は、コーチという専門職の定義づけに複雑さが存することを認めている」(Duffy et al., 2011, p. 102)ことからすれば、専門職^{注3)}に必須の専門知識という能力の内実を問うことなく、単純に「技術と戦術の専門家」という規定でもってコーチを把握してしまうことは妥当ではない。加えて、以下のような問題点も指摘され得るのである。

1 つは、「技術と戦術の専門家」という規定に準拠して、コーチの役割を教師と同定する北米の文献を「無批判に受け容れて」(Lyle, 2002, p. 59) 且つ広範囲に亙って信頼することで、コーチは教師をもって代替することが可能であるかのように解釈していることである (Frost, 1966; Esslinger, 1968; McKinney, 1970 ; 久保 1998)。しかし、教師とコーチをそれぞれ専門職と認めて区別する研究はすでに一連の流れになっているのである (Figone, 1994; Chelladural and Kuga, 1996; Donovan, 1997)。2 点目は、明確な基準もないまま参加志向型と競技志向型とにコーチを分類したり (Nash et al., 2008, p. 540)、国や種目によっ

ては「ボランティア、プロフェッショナル、予備軍」(Duffy et al., 2011, p. 111) といった階層化を図った上で、それぞれのレベル毎に、あるいはそれらを一括して、役割、スキル、資質などの「典型的な特性と属性」(Taylor and Garret, 2010, p. 102) の分析をもってコーチの内実はいきなりし得ると解されていることである^{注4)}。こうしたアプローチは、確かに種目や国毎に特有な違いを通して、最前線の現場でのコーチングの分類や定義からコーチングに影響を及ぼすコーチ個人にかかわるいくつもの文脈を承認する、ということに利点は見出せる。しかしその一方で、プロもいればボランティアもいる中で、それぞれが主張する特性や属性から議論を重ねても、コーチは何者なのかについて整合的な理論が成立することはない。さらには、「コーチング科学のステータス」(Haag, 1994) であったとはいえ、コーチが採る (採った) リーダーシップのスタイルや行動に関与すると判断された要素・要因を取り上げてみても (Becker and Wrisberg, 2008)、適切な分析枠組みが欠如していることも相俟って (Potrac et al., 2000)、そうした研究で示された知見は恣意的な憶測でしかないのである。そして、3 点目は、最も特徴的であるが、コーチングという辛くて骨の折れる仕事を「エピソード的 episodic」に扱う体験談とおぼしきものが数多く存在することである。しかし、「体験談はすべてのコーチが活用できなければ意味がないし、そのためには鍵となる諸原理が分析され説明される必要がある」のであり、「殆どの体験談は、その人と種目に特異なエピソードに過ぎない」のである (Lyle, 2002, p. 31)。つまり、その特異で個別な体験談は、あくまでも「そのつどの」な解釈の域を出ることはないのである。

以上のことを踏まえて、これまでのコーチに言及した研究を総括するなら、或る時代や或る特定の国や種目を、そして、個人を如何に分析したとしても、それらは所詮「日和見的なサンプルの使用」(Lyle, 2002, p. 31) でしかなく、「そのつどの」で「偶然的」な結果しか得られないということである。しかし、アプリアリなものは、いつで

もどこでも妥当するという「いつでも性」、すなわち、「普遍性」を有するが、アポステリオリなものは、或る時代や或る場所でのみ妥当するという「そのつど性」しかもたないのであって、自明のことながら「そのつど的なもの」から「普遍的なもの」を基礎づけることはできない^{注5)}。したがって、混沌とした現下の状況を超克するには、アポステリオリで個別的・偶然的、つまり、「そのつど性」という存在論的性格をもったものではなく、アプリオリで普遍的・必然的な「いつでも性」をもって初めて、コーチという名辞自体の明晰判明さ及びその一義的な在り方は把握され得ると思えねばならないのである。要するに、「われわれの实在は自分の事実性を認識し克服するためにはまず理念性〔本質性〕の領野を必要とする」（メルロ＝ポンティ、1967）のである。

3. 本研究の目的と方法

そこで、本研究は、コーチの「いつでも性」な存在の普遍的規定、換言すれば、コーチの本質を究明することを目的とするものである。しかし、どうすればコーチの一義的な在り方について、そのつど的でなく、いつでも的で必然的な性質である本質へと辿り着くことができるのであろうか。

これまでの研究を顧みるとき、普遍者としてのコーチの本質は、前述したように、諸存在者の分類的整理と相即的に、「帰納的抽象」によって確定されてきたといえる。しかも、一様に「コーチ」という概念を帰納的に抽象するために、コーチと呼ばれる一群の個別的な対象（外延）を比較して「共通にして且つ本質的な規定性」を抽出する作業が唱道されてきたといえる。しかしその一方で、この作業にとって与件たるべき、コーチと呼ばれる一群の対象はどのようにして選定・蒐集されたのか、という重要な前提条件は不問に付されてきたのである。とすると、コーチが何者であるかを「帰納的抽象」によって説こうとしたこれまでの理論は、抽象・確定されるべき当のコーチという者の存在を先行的に知っていなければならないという論理的矛盾を犯すものであり、さらには、論理上、そもそも「帰納」は却って抽出され

るべき当の概念内容（内包）の既知性を前提にしているという点で、個別で特異な諸表象から普遍的概念を導出・形成する手続きになっていないため、コーチの本質を抉出する方法としては妥当しないのである。

したがって、本研究では、そのつど的なコーチという存在者といつでも的なコーチという存在とを区分し、存在を主題として際立たせることで原理的に存在者を超越して存在者の存在へと向かう、という方法を採用ことにする。具体的には、まず、スポーツ指導におけるコーチの存在意義を確認し、次に、コーチという専門職を特徴づけるコーチングのメカニズムを究明することで、最終的に、コーチという存在を普遍的に規定するアプリオリな認識を抉出するものである。本研究の成果は、コーチングのメタ理論としても位置づけられるが故に、専門職としてのアイデンティティの形成ばかりかコーチ教育の再構築など、今後、「コーチングという学術的な分野」のあらゆる局面に貢献することとなろう。

Ⅱ コーチの存在意義

1. 先導者としての所以

さて、コーチの本質を明証的に把握するには、まずもって対象たるコーチという概念の不変の意味を明示しておく必要がある。

わが国の現状を顧みるとき、学校教育の場では運動部の顧問教師、地域におけるボランティアとしてのスポーツ指導者、商業スポーツ施設における有資格者など、独自の環境において様々な職種の人々が「コーチ」と呼ばれている。しかし、こうした環境や職種の異なる状況における「コーチ」という言葉の意味の同一性が、その言葉に結び付けられたイメージの同一性によって支えられているなら、イメージがその持ち主だけの私秘的なものである以上、言葉の意味も私秘的なものと成らざるを得ない。とすると、同じ言葉を使ってコミュニケーションをとることは不可能である。「イメージは唯一の規則を与えない」（Wittgenstein, 1958）と指摘されるように、イメージはその私

秘性故に、公共的且つ相互主観的な同一性を得ることはできないからである。したがって、まず、そもそもコーチは何故に存在するのか、または、存在しなければならないのか、という視点において、その同一性の基準は明らかにされるべきである。

その場合、次の2つの考え方は、その基準を制御するための要件として重要な意味を持つことになる。1つは、普遍者は個物の中に見出されるが、しかしそれはあくまでも普遍者が一例としてその個物のもとに現れているだけであり、普遍者そのものが限定された時間・場所にのみ存在するわけではない、ということである。2つ目は、言葉の働きの解明を通じて諸言語の垣根を越えた共通の論理の解明をねらいとする分析哲学的な手法からみれば、特に論理や意味論に目を転じるとき、言葉そのものが分析対象として措定される、ということである。

このような前提から、コーチ (coach) という言葉の語源に着目するなら、それは、15世紀のハンガリー語 “kocsi” あるいは “kotsi” に由来し、それが “kocsi szekér”, すなわち、「Kocs という村で作られた四輪馬車」の短縮形として用いられたことが窺える (Onions, 1966)。また、その後、この言葉はヨーロッパ諸国へと波及し、16—17世紀のイギリスでは「国王の公式馬車」の意味で、19世紀には「受験指導のために雇われた家庭教師」として、また、スポーツの分野では「競技会、特にボートレースにおいて選手を訓練する者」などの意味で用いられたことが理解できる (Murray et al., 1961)。こうした語源や辞書の定義から判断すると、自明とはいえ、コーチという概念の外延は時代や文化圏毎に拡大されていたといえる。しかし、そうした経緯の中で共通点を挙げるとすれば、現在でもイギリスでは長距離バスや鉄道の客車が「コーチ」と呼ばれているように、「馬車」という地名に由来する言葉が “coach” の原義であったという事実は、コーチが何らかの目的を持った人をその目的地 (目標) にまで確実に送り届ける役割を担っていたことに直結する。このことは、見方を変えれば、客は自ら

1人で目的地 (目標) に到達できないばかりか、それがどこにあり、どのようなものであるかは知らない、ということでもある。逆に、「コーチ (馬車) は目的地 (目標) にまで大切なお客を無事に送り届ける」ということは、目的地 (目標) を勝手に決定・変更できない反面、コーチは目的地 (目標) がどこにあり、それが何であるかを、また、そこに到達するには何をすべきかを、つまり、どのような訓練 (トレーニング) を行ったらよいかをすでに知っている、そういった「先導者」として理解されるのである。

2. 競技者の根源的存在状況

では、コーチはどういった類の「先導者」なのであろうか。ただし、この問題に言及する、これまでのコーチ論やリーダーシップ論の成果は、「一部、有益なものも混じっているが、大半は役に立たない」(Nye, 2008, p. 22) のが現状である。その理由は、「得られる結果は情報として有益ではあるが、決定的なものではない。一番大きな問題は、主題そのものの複雑性にある。成功するリーダーシップを確立しようにも、潜在的に重要と見做される変数が多すぎるため、このテーマについて決定的な論証を得られることなど事実上不可能」(Grint, 2000) だからである。

こうした状況において、「最近のコーチに関する研究は、コーチが直面する最も緊急且つ重要な問題として、チームが団結すること team cohesion を挙げている」(Silva, 1984) という言明は、コーチと競技者^{注6)}に加え、競技者同士、という2つの関係性がそこに伏在していることからみて、「先導者」たるコーチの専門職としての特質を剔抉する上で貴重な論点を提示していると考えられる。その2つの関係性の何れにおいても、目的地 (目標) へと確実に送り届けなければならない客、つまり、競技者がどのような存在なのであるのかをコーチ自身が知らないことには、「チームが団結する」ことなど起こり得ないからである^{注7)}。では、目的地 (目標) に辿り着きたい、すなわち、「『勝利』を目指してプレイするのが当然」(樋口, 1993, p. 27) の立場^{注8)}に在る競技

者は、元来、どのような状況に置かれているのであろうか。

それについても、これまで様々な観点から多くの知見が見受けられる。ただし、近年、コーチングに関する研究は増加の一途を辿っているにもかかわらず、競技者の精神的・身体的発達をテーマとする理論や方法の発展に集中することで、その内実は限定的であることも指摘されている(Potrac et al., 2000)。それ故、上述した課題を克服するには、まず、人間の根源的な存在状況を把握しておくことは必定であろう。その際、人間は元来「欠陥生物」(ゲーレン)であるが故に「可能存在」(ハイデガー)として、そして、「力への意志」(ニーチェ)で不断に超越を目指しているとして、端的とはいえその存在様態を確認することができる。そして、このような立場から人間本性の原状況をみるなら、かのプラトンが「洞窟の比喩」で示した、地下深くに奥行きを持った洞窟の中に、生まれてこの方、奥の方に向かって、手足も首も縛られたまま、動くことも振り返ることもできない状態に置かれている、囚人のような住人たちに関する論考(『国家』514B-541B)は極めて示唆的である。さらには、そこで説かれている哲人統治者のための知的教育を敷衍して、住人たちが置かれている原状況には教育の理念が伏在しており、生物学的な自然法則による段階的な成長過程や運動衝動ないし運動欲求といった、人間に固有の内発的な主体性も前提としつつ、教育が洞窟内の住人にとっては本質的に外発的な「強制」である「魂の向け変え」と「真実在への上昇」のための技術であるとの前提から、『洞窟の比喩』において超越論的に描かれている教育過程は、そのままわれわれの体育過程の形象化としても読み取ることが可能である」(佐藤, 1993, p. 274)とする言明は、競技者の原初的な存在状況を考察する上で貴重な視点を提示していると考えられる。なぜなら、その警拔な洞察は、プラトンの教育に関する言説を種概念である「体育(身体教育)」へと援用することで、特定された作用項(ある人)と被作用項(洞窟の住人)との間で、具体的に選択された媒体項(運動文化としてのスポーツ種目)

を媒介としつつ、条件として設定された目標の実現を目指して構成される関係様態である「体育実践」に、人間本性としての「非運動性」と「超越性」が存することを明晰判明に示しているからである。ごく要約的に示すなら、その内容は次のように纏められるであろう。

すなわち、「ヒトの人間化」を普遍的な目標とする教育に対して、その種概念である体育の普遍的目標は「ヒトの身体面からの人間化」であって、それが具体化されるのは、特殊生活世界における独自の文化的・社会的状況下での人為的關係のもとにおいてである。つまり、ヒトにおけるからだは可塑性を本質とする可能的身体性を有しているが故に、体育の作用がそれを特定の文化性を身に纏った現実態としての身体に変容させることで人間としての生を全うせしめるのである。しかしそれでも、特定の文化性を身に纏うこと自体が「非運動性」の別名に外ならず、「からだの身体化」において媒体となる「運動形式」^{註9)}は、当該の生活世界に独自の文化として、われわれが身に付けざるを得ない疎外態に転化しているのである以上、それぞれの生活世界で伝統化された本質的に特殊なもの足らざるを得ない。それ故、それを身体能力として顕現化することは、必然的に被作用者をして所与として潜在する運動文化の「特殊性への馴致」へと至らしめるのである。しかし、そこまでであれば、非運動性に纏い付かれた「桎梏としての身体」に陥ってしまうことから、体育実践が、われわれをそうした境遇から、「力づくによる身体全体ともどもの向け変え」によって超越を目指さないことには、生活世界の驚異的な連続した変容は全く説明できないことになる。したがって、運動文化と人間とのかかわりにおいては、「特殊性への馴致」と「更なる高度化を目指した現状からの超脱」という2つの様態が看取される(佐藤, 1993, pp. 252-285)、というものである。

3. 競技者の本性

そこで、運動文化と人間とのかかわり方を喝破したこの言説を積極的に受け容れて、それを人間

の身体能力の顕現化の極致に存して、「独特な人為的運動課題を含んでおり、また、きわめて法則的な身体性に立脚している」(樋口, 1993, p. 16)ばかりか、「競争すなわち勝敗を決するシステムが最初から組み込まれている」(樋口, 1993, p. 25) ところのスポーツへと援用するなら、競技者の本性は以下のように理解されるであろう。

まず、洞窟における住人が「縛め」の状況下に置かれていることに類比して、先述した「客は自ら一人で目的地(目標)に到達できないばかりか、それがどこにあり、どのようなものであるかは知らない」こととは、成功したコーチの行動を分析したこれまでの研究で幾度となく指摘されているように、プラトンがいうところの「無知」のままの境遇に競技者は放置されているということである^{注10)}。

こうしたことからすれば、必然的に、客、つまり、競技者は、その「無知」という戒めを解いて当該種目の特殊性に馴致しなければならない存在であるといえる。なぜなら、競技者が技能化することになる技は、すべて当該種目に固有の運動形式を通して超個人的な文化形態として歴史的・伝統的に蓄積されてきており、「目標達成に向けて課題や環境的な種々の制約に適応する」(Malloy and Rossow-Kimball, 2007, p. 319) ために、必ず身に付けなければならない所与のものとして立ち現れるからである。他方で、競技者をその所与的条件に単に馴致せしめるなら、エネルギー系体力に代表される身体能力の驚愕すべき発展・向上や各種目における新たな技や戦術行為の夥しい出現など^{注11)}、競技者がこれまで顕現化してきた驚くべき数々の変容を説明することはできない。とすると、競技力の形成・向上のために、つまり、勝利を追求することに専念して勝敗の決定という競技に自存する目標の実現に向けて、専門的なトレーニングを積んで可能態を現実態へ、その現実態を更なる可能態へと転化させるというプロセスを繰り返して卓越性を獲得するために(内山, 2009b, pp. 172-176)、競技者は「更なる高度化を目指した現状からの超脱」を図らねばならない存在でもあると解されるのである。

他方で、競技者には、これらのこと以外にも決して看過してはならない重要な本性が存するのである。それは、競技者も、一方では「魂の視線を下の方へ」引きずり下ろそうとする「鉛の錘のようなもの」(『国家』519B)に、ウェーバーや佐藤の言葉を借りれば、「鎖 die Fesseln」(ウェーバー, 1983) ないし「負のベクトル」(佐藤, 1993, p. 150) として具象化される人間本性に身を任せてしまう、そういった存在なのであるが、他方で、前述したように、競技者は「『勝利』を目指してプレイするのが当然」であるが故に、この「鉛の錘のようなもの」は通常の間人以上に自縄自縛的な桎梏として作用する、ということなのである。

以上のことから、競技者は、「無知」からの解放を目指して様々な身体資質を現実化しつつも、一方では、当該種目の独自性を継承する者として、その特殊な運動文化に馴致しなければならない。他方では、人間ならば誰しも持っている現状にとどまろうとする本性をより一層超脱せしめることで、もっと強く、もっと速く、もっと高くなど、更なる高みを目指し続けようとする存在であるといえる。そして、コーチは、人間本性に内在する「鉛の錘のようなもの」との「不断のせめぎ合い」の通常のレベルを遙かに超えた状況に置かれている競技者にとって唯一無二の「先導者」として存在するのである。畢竟するに、このことは、競技者を先導するコーチの存在なしに勝利は覚束ないことも意味しているのである。また、このようなコーチと競技者との関係に基づくなら、先に「コーチによって方向づけられる」とされた「コーチング」は、競技者をコーチが勝利の実現に向けて先導すること、と把握され得ることなのである。

Ⅲ コーチングのメカニズム

1. 「先導する」ための前提要件

さて、コーチングとは、コーチが競技者を勝利の実現に向けて先導すること、と規定されたわけであるが、では、コーチは競技者を具体的にどの

ように先導していったらよいのであろうか。

ただし、その前提には、運動形式に基づく膨大な身体技法や一般に「体力」として捉えられる可能的身体性の現実化は身体能力の多様性・多面性にに基づいている、という事実が存する。だからこそ、コーチは、身体能力という確たる対象との直接的な連携性を保持する中で、可能的身体性の現実化に何らかの意図をもって対処しなければならないのである。反面、それは多様と成らざるを得ないのである。しかしながら、それは、結局のところ唯一「勝利」へと逢着するのである。「多くのコーチが直面している非常に現実的なプレッシャーは、勝利についてのそれである」(Drewe, 2000) のも、「勝てなければ、…追い出されてしまう」(Entine, 2000) という事実が厳然として存在するからである。逆に、「勝利」という「目標」を無視してしまうと、「100 m 競走に参加して歩いてゴールする」(樋口, 1993, p. 23)「ゲームの最中にボールを追うことはさておいて相手チームの選手と対話して友情を深め合う」(樋口, 1993, p. 27) といった事態までもが、「何のためにそうするのか」といった観念的枠組みによって行為主体である競技者を統括する「目的」(佐藤, 1993, p. 262) と同一視されてしまいかねないからである。

そこで、コーチが競技者を勝利の実現に向けて先導する、その意図を、先述した「特殊性への馴致」と「更なる高度化を目指した現状からの超脱」という体育過程の2つの様態を用いて考えてみると、次のようなことがみえてくるであろう。

第1に、「特殊性への馴致」を上述した「目的」として捉えると、それは、実現すべき実体的対象である「勝利」という目標設定の在り方に影響を及ぼす条件になる、ということである。このような「目的」と「目標」との関係性を別の視点からみると、先述したように、最近のコーチに関する研究において、「チームが団結すること」は、「コーチが直面する最も緊急且つ重要な問題」なのであるが、その「団結」のために、細部の身体技法に拘った或る戦術行為の習得を勝利に不可欠な「特殊性への馴致」の現実化としてコーチが意

図した場合、その戦術行為そのものは目標としての確たる対象性を持つが、団結は条件(目的)として、戦術行為の習得を意義づけ理由づけるための属性に外ならないのである。もちろん、この属性が機能しなければ、戦術行為の習得ばかりか勝利の実現も難しいのであるが、戦術行為そのもの(目標)は特定できる一義性を持っているのに対し、理由づけのための属性(目的)はこの団結以外にそれこそ多様で有り得るため、両者の間に一対一の必然的な対応関係は成立しないのである。

第2に、「更なる高度化を目指した現状からの超脱」は、「特殊性への馴致」が現実化することで初めて可能になる、という事態を有するということである。なぜなら、顕現化された身体能力が直ちに桎梏に転化してしまうというのであれば、「コーチングは無力である」という命題に帰着してしまいかねないが、プラトンにおける「力ずくの身体全体ともどもの向け変え」に始まる、かの超越的な教育過程、すなわち、あの「上向への旅」は真なる世界を見届けさせたいとする「ある人」と、できることなら辛い旅は止めにして、元いた安住の地に戻ろうとする洞窟の住人との不断のせめぎ合いからみれば、その道程には〈善のアイデア〉という最終目標に向けて慎重に準備された、いくつもの階段の各々において「慣れ」(『国家』516E) というものが介在し、その地点からさらに「先に進む」には「現状からの絶えざる超脱」を果たさなければならなかったのである。とすると、「勝利」という目標を実現するためにも、この「先に進む」には、競技者と不断のせめぎ合いの中で、コーチは何はともあれ当該種目に固有の「特殊性への馴致」を果たした上で、そのレベルからより一層進化・発展させた新たな身体諸能力の顕現化を図るべく「更なる高度化を目指した現状からの超脱」を推し進めねばならないのである。このことは、最高次の「勝利」という目標に対して、一方で、両者は何れも目的として機能するが、他方で、「更なる高度化を目指した現状からの超脱」は「特殊性への馴致」の目的として現象し、それが後者の現実化に向けて力動化する契機と成り得る、という事態としても把握され得る

のである。そして、この事態は、要するに、「多数存在する目的を並列的に等価とするのではなく、目的Aのために目的Bが選ばれ、さらにその目的Bのために目的Cが選ばれる、というように、各々の目的同士の間に、謂わば『目的—手段』の連関を導入することで、多様な目的が階層的秩序を有していると把握すべき」(内山, 2009a) ものなのである。

以上のことから、「特殊性への馴致」と「更なる高度化を目指した現状からの超脱」という目的は、競技者を「勝利」へと先導するための条件として、それぞれがコーチの意図のもと主題化されることになるのである。

2. 体育過程の形象化としてのコーチング

ところで、上述したことは、「目的」としての「特殊性への馴致」と「更なる高度化を目指した現状からの超脱」という条件のもと「勝利」という目標が設定される、ということでもある。しかし、これは具体的にどういったことを意味しているのだろうか。それを検討する上で、2つの条件それぞれの内実と両者を統括し制御するプロセスを明示することは不可欠な作業であろう。

しかしながら、『『コーチング・プロセス』と呼ばれる一般的な概念は存在するけれども、このプロセスについての共通理解はコーチングのあらゆる状況に適応できるまでには至っていない」(Lyle, 2002, p. 36) のが実状である。なぜなら、「スポーツ・コーチングは、一般に科学の学習で汎用される『仮説→実践→検証』という段階で組織することのできないものである」が故に、「これまでその過程は『不可視のもの』として扱われ過ぎていた」からである(Uchiyama, 2002)。それに加えて、これまでの状況は、「優秀と見做されるコーチは何人も存在したが、それらコーチたちはコーチングに神秘的なオーラを漂わせていたに過ぎない。その奥義を究めた知識、方法、経験についての彼らの主張は、秘密主義的な殻に覆われたまま」(Lyle, 2002, p. 27) だったのである。それもこれも、「権威主義的なやり方で与えられるアドバイスが前向きであることは減多にない」

(Jones et al., 2002) ことに無知であった上に、「コーチの気まぐれな人格に左右される神秘的なプロセスであったり、調査や自己反省もない直観的且つ感覚的なプロセスである」という「信念」(Lyle, 2002, p. xiii) が罷り通っていたからである。

そこで、こうした現状を潔く認めて、改めて2つの条件を制御するプロセスについて考えるなら、先の「体育過程」をめぐる論考は正鵠を射ているといえる。なぜなら、「人間本性としての非運動性と超越性」をプラトンの「洞窟の比喻」から抉出した、その「体育過程」に関する言説は、「体育実践を一方的な被制約性のもとにあるとみなすのは現実的でない。われわれの体育実践には、本来的に、現状に停滞することを拒否し、持続的な超越を志向する契機が内在している」(佐藤, 1993, p. 270) との問題提起から発せられているだけに、従前のコーチングに存していた「不可視のもの」の内実を解き明かす上で大いに参考となるからである。

体育を身体教育という原義に立ち戻って吟味する中で、佐藤は、 $PE=f(a', b', c' | P')$ という関数的定義から「関係性」を、「実存的体育」「制度体育」「体育実践」という位相的区分から「重層性」を、力動的な「超越的機能」から「超越性」をそれぞれ戦略カテゴリーに据えることで、体育「概念」を明晰判明に規定している。そして、「体育過程」は、その「重層性」の個別的位相に在る「体育実践」との関連の中で次のように説明されている。

現実にわれわれが目にする体育過程は、(体育概念の) 形式的定義、 $PE=f(a', b', c' | P')$ における構成契機のそれぞれを個別的に特定できるものであって、こうした個別的位相にある体育過程を、われわれは、体育実践という概念によって把握するのである。(佐藤, 1993, p. 260: 括弧内は引用者)。

ここで示された体育実践とは、ラングに対するパロールあるいは教育制度に対する教育実践と同

様、社会的システムとしての制度体育を根拠とすることで初めて成立可能となる体育事象における個別的な現象形態を指している。つまり、体育実践とは、これこれと特定された作用項（a'）と、同じく特定された被作用項（b'）との間で、具体的に選択された媒体項（c'）を仲立ちとしつつ、条件として設定された目標（P'）の実現を目指して構成される関係様態として示されている。

とすると、この個別相での「体育過程」は、そもそもプラトンが示した、「ある人」が「洞窟の住人」との間の「不断のせめぎ合い」の中で、紆余曲折を繰り返しながら「暗闇から光り」へと導く過程を基礎にして導出されたものであることから、それを「人生を極めるという意味で、チャンピオンを目指すコーチの歩みと同じ道程」（Lynch, 2001）として理解することに問題はないであろう。したがって、上述の作用項（a'）、被作用項（b'）、媒体項（c'）、目標（P'）を、それぞれコーチ、競技者、運動文化（スポーツ種目）、勝利、と特定するなら、先導者たるコーチが運動文化を介しつつ無知なる競技者との紆余曲折を繰り返しながら勝利へと至るそのプロセスは、正に、コーチング・プロセスの形象化として読み取れるのである。

他方で、佐藤は、体育の個別相における実践過程である「体育過程」に「普通体育」と「専門体育」という2種類の型を見出し、前者は人間能力の基礎的で広範な可能性の顕現化を、後者は特定分野や領域の専門化、高度化、深化を、それぞれ目指すものであるとして明確に区分している（佐藤, 1993, p. 287）。実は、この概念的区分こそが、上述したコーチが競技者を先導するプロセス、すなわち、コーチング・プロセスの内実を明らかにする上で極めて重要な視点をもたらしてくれるのである。

3. プロセスの二重作動

さて、体育の実践過程を「普通体育」と「専門体育」とに区分するとしたその前提には、「あらゆる文化は、具体的な個々人の能力を媒介としな

い限り伝承不能なのであって、こうした事情は、運動文化の場合も、全く、同様である」（佐藤, 1993, p. 287）という基本認識のもと、運動文化と身体能力との明確な関係性がある。それは、「専門体育」とは、「普通体育」が「運動文化が被作用項における新たな身体能力顕現化のための媒体項として位置づく」のとは逆に、「運動文化が、優れた身体能力を媒介することによって、さらに運動文化として伝承・発展していく」という事態である。このような事態はまた、スポーツの実践過程において、以下のような内実を有する事象として表されている。

スポーツという運動文化における運動形式を、特定の個人の運動能力（技能）として体系的に現実化するには、当該スポーツ種目を媒体項とする専門的指導者（作用項）と競技選手（被作用項）との関係の構築が不可欠であって、早くもここに体育的関係性の存在を見いだすのである。また、人為が作り上げた高度で複雑な身体技法の体系を自らの技能とするには、選手自身がその体系のもとに自らを秩序化していかなければならないが、ここには明らかに自然本性からの逸脱がある。さらに、指導者と選手の間には、より高度化を目指して現状を超脱しようとする超越的契機も介在していて、われわれは、専門体育における確たる教育（体育）的基盤の存在を認めないわけにはいかない（佐藤, 1993, pp. 289-290）。

この言明から、普通体育の到達点が新たな身体能力の顕現化であるのに比して、専門体育のそれは、指導者と選手との接触を通じて運動文化が個々人の身体能力を媒介としつつ変容・進化した新たな展開をみた運動文化であることから、この2つの実践過程が果たす役割は異なっていることが窺える。ただし、それら2つの実践過程は、何れもが教育的基盤に基づいて生起するのであるが、対立したりするようなものではなく、かといって統一することもできず、円環するわけでもなく、むしろ同時に進行しているのである。

そこで、こうした「質を異にする複数のものが

作動の継続をつうじて連動することであり、いずれか一方に解消することも、帰着することもできないような事態」に対して、「二重作動」（河本，2002）という名辞を付与するなら，コーチングにおいては，専門体育の実践過程を基本とする中で，勝利という明確な目標の実現に向けて2つの実践過程が「二重作動」している，と把握され得るのである．なぜなら，専門体育のそれは，運動文化（当該種目）の特殊性に競技者を馴致せしめた上でそこからの超脱を競技者に継起的に促していく一方で，そのプロセスは競技者自身の身体能力を媒介とすることで維持されているからである．別言すると，専門体育の実践過程は運動文化の生成プロセスでありながら，その生成プロセスは次の生成プロセスに接続していくのであるが，前述したエネルギー系体力に典型的であったように，その接続は「可能的身体性」を本質とする身体能力の驚愕すべき発展・向上を生成せしめるプロセスが作動して初めて可能だからである．他方，身体能力のこの生成プロセスもまた，運動文化を介することで作動し継続しているのである．

以上のことから，コーチング・プロセスは，専門体育における実践過程が作動し継続していく中で，質の異なる普通体育のそれと密接に連動する「二重作動」というメカニズムから成り立っている，と理解されるのである^{注12)}．

ところで，先述したように，自ら1人で目的地（目標）には到達できないばかりか，それがどこにあり，どのようなものであるかは知らない競技者が，勝利へと到達できるか否かは，いつに先導者としての「ある人」にかかっているのである．そして，その「ある人」とは，プラトンをして「哲学者」（『国家』520B）と呼ばしめた者なのである．しかし，自明とはいえ，それは，コーチが哲学者で代替され得ることではない．もしそうなら，コーチは教師でもあるといった，これまでと同様の撞着に陥ってしまうであろう．それ故，それはあくまで「哲学的 philosophical」（Wooden, 1999, p. 1: Malloy and Rossow-Kimball, 2007, p. 311）と解されるべきであって，それをもって初めて，コーチの専門職としてのアイデン

ティティへと辿り着く道筋もみえてくるのである．

Ⅳ コーチの根源的な使命と役割

1. コーチの使命

では，「哲学的」，敷衍するなら，「哲学者に類比する」と見做されるコーチとはどのような存在なのであろうか．

かのプラトンは，「真の哲学者とは」という問いかけに対し，「真実を観ることを…愛する人たち」（『国家』475E）と述べている．それはまた，イデア論的思想に支えられた以下の言説から具体的に窺うことができる．

哲学者とは，つねに恒常不変のあり方を保つものに触れることのできる人々のことであり，他方，そうすることができずに，さまざまに変転する雑多な事物のなかにさまよう人々は哲学者ではない（『国家』484B）．

この規定からすれば，「哲学者に類比する」と見做されるコーチが，今その場に立っている現状に「慣れ」て，すなわち，「馴致」して，その地点からさらに前進するために「更なる高度化を目指した現状からの超脱」を継続していかなければならないコーチングにおいて，競技者に対して採るべき行動の要諦は，その「つねに恒常不変のあり方を保つものに触れることのできる」という言葉の中に潜んでいると考えられる．そこで，便宜的にそれを，「つねに恒常不変のあり方を保つもの」と「触れることのできる」とに二分してみるなら，後者の「触れることのできる」は，「慣れ」（「馴致」）に言及する，以下のような「作用項—被作用項」という関係性に大にかかわってくることになる^{注13)}．

人間化への道程は，「その文化の代表者 Vertreter の1人あるいは何人かと緊密な社会的接触 sozialer Kontakt」をとり結ぶことによる，いわば「文化的刷り込み」を基点として出立する．つまり，初期条件としての「社会的接触」

は、互いに誰それと特定できる個別的存在者によって構成される関係であるほかなくて、このことは、身体面からの人間化という普遍的目標に条件づけられながら、特定の作用者と特定の被作用者の関係として営まれる体育実践の場合でも、全く同様なのである（佐藤，1993，p. 254）。

この言説に基づくと、「体育実践」は、「作用項—被作用項」という関係性において、作用者との「接触」を通じて被作用者に具体的に特定され顕現化されていく、と理解することができる。そして、その場合に媒介項となるのは、身体技法上の当該生活世界に独自の、謂わば「文化的刷り込み」として、体育実践を通して習慣性の形成を促すところの「運動形式」である。それ故、作用者が被作用者において、これを身体技法獲得のために身に付けさせようとしている意図は明らかである。

こうしたことは、スポーツにおいても同様であって、多様な「体育実践」がコーチによって自覚的に展開されている。ただし、その場合、運動文化そのものの獲得を目標とする、つまり、当該種目における身体技法をわがものとする（「特殊性への馴致」）場合ですら、喩えそれがどんなに易しくみえるものであろうと、先にみた「鉛の錘のようなもの」の呪縛を解き放つために多くの時間と持続的な努力が必要とされるのである。

一方、勝利を目指すとなれば、そのための身体技法は飛躍的に専門化し、それらの習得には反復を繰り返すことが不可欠となる。だからこそ、持続的で創意工夫に満ちた訓練（トレーニング）が要求されるのである。しかも、こうした専門的な体育実践は、個々のスポーツ種目の持つ特殊性が複雑になればなるほど、競技者が馴致するレベルはますます高度化し、その度合いも深化、精緻化していくのである。加えて、「更なる高度化を目指した現状からの超脱」も、競技者はその都度成し遂げていくことになるのである。ただし、先にみた洞窟の住人に対する「縛め」が人間本性に内在する「鉛の錘のようなもの」の形象化であってみれば、それからの解放が、競技者においてはな

おさら「自ら独りでに」達成されるといったものでは有り得ず、また、こうした状況に在ることは、無知の境遇に放置されていることでもあって、住人たち、すなわち、競技者がこうした縛めから解放され、無知を癒されるためには、誰か他者の働きかけによる「力ずくの身体全体ともどもの向け変え」が必要不可欠なのである。だからこそ、コーチは、身体能力を媒体とする実践過程の「二重作動」に主体的且つ積極的にかかわっていかねばならないのである。

以上のことを、これまでのコーチングに隠されていた前述の事態と関連づけて纏めるなら、「触れることのできる」という言葉に潜在していたコーチの使命とは、勝利するという普遍的な目標を実現するために、「鉛の錘のようなもの」をものともせず、「特殊性への馴致」と「更なる高度化を目指した現状からの超脱」を図らんとする競技者の身体全体の向け変えを外発的に「強制」する「効果的な触媒」（Freischlag, 1985, p. 68）として機能することであるといえる。

2. 知的営為としてのコーチング

他方、こうした使命を帯びたコーチが、「つねに恒常不変のあり方を保つもの」に「触れることのできる」とは、どういった事態なのであろうか。その際、そこには次のような重大な条件が伏在しているのである。それは、哲学者が「真実を観ること」を、つまり、「上昇の道を上りつめて」（『国家』519D）、「美なるもの、正なるもの、善なるものについて、すでにその真実を見てとってしまっている」（『国家』520C）、ということである。

とすると、哲学者が担っていた「美なるもの、正なるもの、善なるもの」の「真実」を見届けさせようとする旅が、前述したように、「人生を極めるという意味で、チャンピオンを目指すコーチの歩みと同じ道程」を歩む旅であると思倣されるなら、競技者とせめぎ合いながら歩むことになる、その道程においては、勝利するには何が正しいのかということを見極めさせようとする「外発的な力ずくの強制」にコーチ自身が通暁していな

なければならないことになる。もちろん、それには、「特殊性への馴致」と「更なる高度化を目指した現状からの超脱」を推進するために、身体能力を介しての「運動文化→運動文化' →…」という専門体育の実践過程を主動する「運動文化」自体がどのような身体技法の体系のもとに成っているのかを知っていなければならないし、運動文化を介して身体能力を高め、その高まった身体能力によって新たな運動文化を生成していくことを繰り返すメカニズム、すなわち、コーチングの実践過程に固有の「二重作動」という事態に自覚的であらねばならない。そして、何よりも、そうした前提を、すなわち、種目固有のパフォーマンスが実現される前段としてのイメージ形成と種目に特異な身体技法の習得と新たな次元の優れた運動文化との生成とに密接に連動する、「推理〔思惟〕と呼ばれる過程と制作と呼ばれる過程」（アリストテレス、1968、1032b15-16）を併呑する「技術」および「戦術」という知的能力の行使の仕方に熟知していなければならないのである^{注14)}。先に、コーチは単純に「技術と戦術の専門家」とは見做されないとしたのも、実は、このことに依拠しているのである。さらには、もしこうしたことをコーチが知り得ていないなら、勝利という目標を実現する上で、何が正しくて正しくないのか、その是非の決定に不可欠な「価値にかかわる能力」である「感性」（内山、2009b, p. 174）も全く機能しなくなってしまうのである。

では、勝利を実現するには何が正しいのかということを見極めさせようとする「外発的な力づくの強制」の方法を、コーチは如何にして「知」ることができるのであろうか。「洞窟の比喩」に立ち戻れば、それは、コーチ自身をコーチたらしめることになる「先導者」の「導き方」に存するとみるのは自明であろう。ただ、こうした先導者に導かれながらの「知」への道程は、前述した競技者のそれと同様、常に「鉛の錘のようなもの」として立ち現れてくる自らの本性とせめぎ合いながら、一步一步自らの足で急峻な道のりを進んで行く以外にないのであって、そこに近道は存在しない。しかし、どうにかコーチがコーチとして自立

するに至ったとき、彼は先導されていた更なる高度化と精緻化のための「上方への遙かなる旅」から反転し、プラトンに抛れば、今度は自らが先導者となるべく洞窟内に帰っていくことになるのである。

その場合、最も重要なことは、この時点での彼の「知」が、もはや「体験知」としてではなく「理論知」として実在している、ということである。要言すれば、コーチが当該種目において、勝利を実現するには何が正しいのかということを見極めさせようとする「外発的な力づくの強制」の方法を「知」っているといえるためには、体験的次元を超えて、客観的に検証された理論としてそれを把握していなければならない、ということなのである。そうでないと、コーチは、自身も先導者が導いてくれたように、自分を超越する者を創り出すことで競技者やチームを勝利へと導いていく、という「効果的な触媒」としての使命も十分に果たせなくなってしまうのである。なぜなら、「体験的現象という主観的現象における『内部からの解釈』」（西部、2002）からもたらされる「知」は、その個人に固有のものであるとともに、本質的に「私秘性」を帯びているからである。しかし、勝利を目指して、運動文化を新たな運動文化へ発展的に変容させるというのは、当然のことながら「未知への挑戦」ということであって、それ故、既知の体験に頼るだけで競技者を誰も到達したことのない地平へと導いていくことは、原理上、不可能である。したがって、「コーチ本来の役割を果たすためには、個人的次元に留まっている『体験知』に依るのではなく、客観的に検証された理論によって、出来事の合理的説明あるいは将来の予測可能性を持つ『理論知』の援用が必要不可欠の条件になってくる」（佐藤、2011, p. 62）のである。

要するに、勝利という目標の実現のための先導者たるコーチに導かれての苦痛に満ちた長い旅は、「可視界」から「可知界」への、すなわち、「感覚・知覚」による認識から「理性・思惟」による認識への移行過程に外ならないのであって、もし「体験知」で導こうとするなら、プラトンが

述べていたように、「さまざまに変転する雑多な事物のなかにさまよう人々」に、別言すれば、「サイドライン上を歩きながら不愉快な言葉を怒鳴っている、逆上したコーチ」(Jackson and Delehanty, 1995, p. 6)「地獄のような海兵隊式のトレーニングをさせることで選手同士の連帯感が強められるとするコーチ」(Jackson and Delehanty, 1995, p. 124)「選手から用具係に至るまで全員の手綱をきつく引き締めて厳格な行動の指針を作成する、支配中毒のコーチ」(Jackson and Delehanty, 1995, p. 151)「選手たちのばかげた要求に迎合する、放任過ぎるコーチ」(Jackson and Delehanty, 1995, p. 152) となってしまうのである。

3. 専門職としての役割

とすると、コーチとしての実践、すなわち、種目固有のパフォーマンスが実現される前段としてのイメージ形成と種目に特異な身体技法の習得と新たな次元の優れた運動文化との生成に不可欠な「推理過程」と「制作過程」を併存する知的能力の行使の仕方を体験のみに委ねられないのだとすれば、コーチが自らに「脱体験化」への研鑽を課していかなばならないことは至極当然のことであろう。そうした先導者としての努力はまた、コーチングにおける「超越的機能」を保証することにもなるからである。

被作用者である競技者を超越せしめるためには高度化と精緻化が追求されるのであるが、やはりその前に、一端現実化された身体能力は、その限りにおいて競技者としての能力の拡大を意味する。しかし、同時にそれは、種目に特異な身体技法の体系を有しているために「非運動性」をも伴っているのであって、先導者としてのコーチは、何を措いてもまず、この矛盾する事態に自覚的であらねばならない。これに加えて、「二重作動」が継起するコーチングにおいて、「推理過程」と「制作過程」とが運動文化の生成とそのための身体能力の介在の仕方とに密接に連動する、という事態を「知」り得たとき、コーチは自らの体験に基づく対処を許さないものであることを認め、

「理性・思惟」による認識である「理論知」による先導を不可欠なものとするを「知」ることになるのである。コーチがそのような対処を等閑視するなら、被作用者である競技者の身体能力の顕現化はもとより、「習慣性」によって獲得される現状を超越するために「創造性」を発揮せしめて、競技者を新たな次元の優れた運動文化の獲得へ至らしめることなど不可能である。このことからすれば、コーチングにおける超越的機能は、何よりもまず、作用者たるコーチの、勝利を実現するには何が正しいのかを見極めさせようとする「外発的な力ずくの強制」の方法を習得するための「不断の自己研鑽」にかかっているのである。つまり、「競技者に詳細に且つ正確で適切な知識を与えるためには、自分自身が向上し続けることと自分がコーチしている競技の知識を獲得し続けることが重要」(Becker and Solomon, 2005, p. 208)なのである。

加えて、コーチ自身が行う「不断の自己研鑽」は、コーチ自身の頭の中で具象化すべきパフォーマンスについて、自分が体験したことのないレベルのイメージを明確化せしめることにもなるのである。つまり、種目に固有で多様な理論知は、「こうすればこうなるであろう」という理論的仮説の設定を可能とすることで明確なイメージの形成に繋がる「推理過程」に貢献するその一方で、トレーニング法ばかりか当該競技を競技として成立せしめるルール及び勝利を方向づける戦術など、新たなパフォーマンスを実現する際の「制作過程」にかかわる多様な「知」をも駆使せしめるのである。だからこそ、コーチは競技者を先導する上で「推理過程」と「制作過程」にも通暁しなければならぬのであって、その何れにおいても、あるいは相互に影響を及ぼし合う際においても、理論知は必須の要件と成り得て、その活用を通して初めて、競技者を勝利へと導くことが可能になるのである。

以上、これまでの考察を纏めるなら、コーチの一義的な役割とは、競技者をして、まず、当該種目の身体技法の体系に「馴致」せしめ、次に、現にそこでプレイするレベルを不断に相対化させ、

絶えず現状から「超越」せしめて新たな次元のパフォーマンスを通して勝利を実現することにある、といえる。そして、コーチの本質とは、勝利という目標の実現に向けて、理論知に基礎づけられた「推理過程」と「制作過程」とから成る知的能力を駆使して「身体全体の向け変え」を外発的に力づくで強制する、別言すれば、「鉛の錘のようなもの」による拘束から競技者を常に解き放ち、勝利のために「強制力」(『国家』526B)を行使することである、と結論づけられる。

ただし、その場合の「強制力」とは、類似する言葉として連想されるマキアヴェリズムのな「管理教育」とは本質的に全く逆であって、「何等かの特定の条件に合致させるため、あるいはあらかじめの取り決めごとから逸脱させないために統制しようとする」のではなく、「むしろ特定の条件下での拘束から常に脱却させようとして『強制力』が行使される」ことなのである(佐藤, 1993, pp. 158-159: 傍点は引用者)。したがって、この意味を「知」らずに、あるいは履き違えたり無視するなら、勝利至上主義を現出せしめる淵源であって、「スポーツの本質特性と絡んで結果として引き起こされる、スポーツを取り巻くさまざまな勝利、利権への欲望」によって、「選手権やオリンピックでゲームに勝って金メダルをもらい、その結果、名声や金銭を獲得すること」を究極の目標とする「外的な競争性」にしか自身のアイデンティティを見出せない(樋口, 1993, pp. 27-28)、「強制力」行使の仕方を間違えた、コーチとは名ばかりの「感覚的で、卑俗で、とりとめのないものにかかずらう人」(ヘーゲル, 1998)となってしまうのである。

V 結 語

スポーツを実践する際、コーチはこれまで重要な役割を果たしてきたし、その存在は今後ますます重視されるであろう。しかし、現状は、他の専門職と比して、固有のアイデンティティや専門職たらしめる根源的な諸原理が自覚されることもなく、「そのつど」な解釈と対応がなされること

で、種々様々な混乱が生じている。そこで、本研究では、原理的な諸問題への還帰は依然として常に新たに着手されるべき課題の1つであるとの前提から、コーチの「いつでも的」な存在の普遍的規定、換言すれば、いつでも的で必然的な性質である本質の究明が試みられた。

この目的を達成するために、本研究では、そのつど的な存在者といつでも的な存在とを区分し、存在を主題として際立たせることで原理的に存在者を超越して存在者の存在へと向かうことで、スポーツ指導におけるコーチの存在意義とコーチという専門職を特徴づけるコーチングのメカニズムの究明から、最終的に、コーチという存在の普遍的規定についてのアプリオリな認識の扶出をもってコーチの本質を規定する、という手続きが採られた。

考察の結果、コーチは、勝利という目標の実現に向けて、競技者を、まず、当該種目の身体技法の体系に「馴致」せしめ、次に、現にそこでプレイするレベルを不断に相対化させ、絶えず現状から「超越」せしめる役割を持った専門職であることが明らかとなった。そして、最終的に、コーチの本質とは、理論知に基礎づけられた「推理過程」と「制作過程」から成るコーチングという知的営為を統御する先導者として、勝利に向かって競技者の「身体全体の向け変え」を外発的に力づくで強制する、つまり、「鉛の錘のようなもの」による拘束から競技者を常に解き放ち、「強制力」を勝利のために行使することである、と結論づけられた。

なお、この「強制力」行使に不可欠な独自の知識構造は、「①公式もしくは非公式の教育(養成コース、クリニック、セミナーなど)、②他のコーチの観察と情報の収集、③熟考を重ねた上での一貫した指導経験、④自分との闘い、⑤助言者や整備された教育プログラムの存在」によって形成可能であることが報告されている(Jones et al., 2003, p. 220)。それらの中でも、④は、「プロとしての知識の構築は、本質的に個人の責任である」(Jones et al., 2003, p. 213)とか「リーダーの特性とは単なる天性の資質ではなく、…学習に

よって身に付く」(Nye, 2008, p. 15) という識見からも窺えるように、「強制力」を培うコーチ教育の重要性を再認識させるものである。他方、その課題は、①や⑤にも関連して、「従前のコーチ教育プログラムは、その殆どが結果からもたらされた断片的な内容で構成されてきたに過ぎない」(Cassidy et al., 2004) という言明が示すように、「強制力」行使に当たって指針とすべき「いつもの」な規範的原理の究明を促してもいるのである。この魅力的な課題の究明については他日を期したい。

注

注 1) 「帰納的抽象」では事象内容を有する本質の究明が論理上不可能なことは、洋の東西を問わず、これまで数多の論者によって指摘されている。例えば、廣松は、「(漠然たるかたちでの既知性に基づいて) 帰納的抽象による旨を云々しようとするれば、無限遡行に陥る」(廣松, 1982: 括弧内は引用者) と述べ、この方法を用いた概念分析の方法論が孕む問題点を明示している。この意味で、2010年3月に「日本スポーツ方法学会」から名称変更された「日本コーチング学会」の機関誌『コーチング学研究』において、2011年から冒頭に掲げられた「私の考えるコーチング論」という特集は、「不定数の定義づけを促進する」という事態を証示する典型例である。そこで語られている論者毎の「コーチング論」は、「現場の経験を通して獲得された個々の実践知から帰納的に…」あるいは「帰納的に集約しそれらの体系化を通して」(朝岡, 2011, p. 15) といった言明からも明らかなように、漠然たるかたちで既知と認めてしまったコーチングについての理論的根拠のない、「私はこう思う」という恣意的な観念ないしその人だけにしか確認できない私秘的イメージの域を出ないものである。このような「コーチング論」は正にわが国の状況を反映しているといえよう。なお、これと同様の事態は、後述する「コーチ論」においても看取することができる。

注 2) 1970—2001年という限定された期間ではあるが、Gilbert and Trudel は、“Applied Research in Coaching and Athletics Annual” “Journal of Sport Behavior” “Journal of Sport and Educator” “The sport Psychologist” という4つを挙げている (Gilbert and Trudel, 2004, p. 390)。

注 3) ここでの「専門職」とは、当該専門分野が担う役割や機能が社会一般に貢献し得ると認められる地位や立場を総称する名辞として用いている。それはまた、靴屋には靴を作るための、医者には病気を治すための「専門知識」(『ニコマコス倫理学』1094a8) があるように、或る目的を実現するための専門知識としての能力を有する者たちによって組織される職域として解される。

注 4) 例えば、全米バスケットボール・コーチ協会が20世紀の最も偉大なコーチとして認定した、元 UCLA のヘッドコーチ John Wooden (1910—2010) が掲げたものは、その好例であろう。彼は、「自分の選んだコーチという仕事でトップに立ちたいと望む人が持つべき人間としての必須な特徴と能力は次のようなものである」とし、それを「根本的特徴」と「二次的特徴」とに分け、前者には、勤勉さ、熱意・情熱、同情・思いやり、判断・思慮分別、自制心、真剣さ・忠実さ、忍耐力、細部への注意深さ、公平さ・不偏さ、誠実さを、後者には、人付き合いの良さ、外見、表現力、適応力、協調性、激しさ、的確さ、警戒心、信頼を受けること、楽天的気質、臨機応変さ、ビジョンを挙げている (Wooden, 1999, p. 10)。しかし、それらが専門職としてのコーチに固有でないことは一目瞭然であろう。

注 5) 平易にいうなら、「アプリオリ」とは、「 2×2 は4である」は「永遠の真理」であり、「 2×2 は4であった」というように過去形に「時制変化」することはない、「ある」で表されるものである。他方、「車は最速の乗り物である」という命題は過去の或る時代においては「事実の真理」であったといえるが、それはもはや現代では真理ではない。「アポストリオリ」とは、「車は最速の乗り物であった」というように、過去形に「時制変化」する、つまり、時制変化する「ある」で表されるもの(「あった」になるもの)を指し示している。

注 6) これまで明確な規定もないまま用いられてきた「競技者 athlete」という名辞について、本研究では、樋口に依拠して(樋口, 1987, pp. 103—171)、スポーツを実践しているときばかりか、スポーツ実践を離れても当該スポーツへ積極的にかわる人々として捉えている。この意味で、競技者は、実践者 (performer) や選手 (player) と同義である。

注 7) これは、「コーチと競技者との人間関係が最適であれば、個々の競技者ばかりかその集合体であるチームにも多大な影響が及ぶことで集団的なパ

パフォーマンスは極限にまで拡大し得る」一方で、「コーチと競技者との負しい関係は才能に恵まれたチームにとってマイナスに成り得る」ということも孕んでいる競技者との関係が最適となるような、固有の「先導者」としての役割がコーチには求められていることを意味している (Jones, 1974). 他方で、競技者同士の人間関係については、「メンバー同士の仲違いはチームにとって必ずしも悪いことではなく、パフォーマンスを悪化させる要因でもない. それどころか、メンバーが問題視するような人間関係のトラブルがチームのパフォーマンスを高めたり、学習の機会を提供したりすることもある」とか「仲が悪いから成績が伸びないのではなく、成績が伸びないから仲も悪くなってしまう」といった意見も存在する (Hackman, 2002). コーチと競技者、あるいは競技者同士の望ましい人間関係はチーム・パフォーマンスの卓越性と競技者個人の満足を十分に獲得させ得る要因と成り得る一方で (Freischlag, 1985, p. 68), 現代のスポーツ界ではチームが成功したところで大きな調和が生まれるわけではなく、成功したことで逆にチーム内に軋轢が生じる場合があることも厳然たる事実である。

注 8) 競技者が常にこのような立場に在るとする根拠は、スポーツを「遊戯性」「組織性」「競争性」「身体性」という4つの本質特性から規定し (樋口, 1987, p. 31; 1993, p. 22), なかでも、「競争性」を「内的」と「外的」とに区分することで、スポーツにおける「勝つこと」ないし「勝利」の旗幟を鮮明にした樋口の言明からも確認することができる。「内的な競争性と外的な競争性の次元を混同すべきではない」(樋口, 1993, p. 28)と主張し、スポーツの本質を構成する特性の1つである「競争」の内実を峻別した樋口によれば、前者は、「ルールを遵守して勝つことを目指してプレイすること」である。要するに、内的な競争性によって、スポーツはその存在が規定されるのである。だからこそ、「オリンピックで争うような高度なレベルにせよ、レクリエーションalに行われる場合にせよ」、競技者は「必然的に勝利をめざし勝利に積極的に関心づけられる」ことになるのである (樋口, 1987, pp. 112-113)。

注 9) 「運動形態を構成せしめるよう法則的に機能する形式」(佐藤, 1993, p. 243) のことである。つまり、個々人の運動技能とは独立的であって、それぞれの運動技能を個々人において現実のもの(運動形態)として顕現化する法則的根拠を意味

している。

注10) 従前の研究では、成功を収めたコーチの方がそうでないコーチよりも、練習中至る所で競技者に数多くのフィードバックを与えていることが明らかになっている。例えば、前述した Wooden の非凡な能力に着目し、彼のコーチングの内実を分析した研究によれば、彼の行動は「積極的なフィードバック positive feedback において最も注目すべきケースである」ことが判明している。その報告によれば、トレーニング・ユニットにおいて彼が採った行動の内、言葉による命令・指図 verbal instruction の割合は50.0%であり、激励 hustle (12.7%), 称賛 praise (6.9%), 叱責・非難 scold/reproofs (6.6%) に比して、最も頻繁に行われていたことが明らかにされている (Tharp and Gallimore, 1976). なお、こうした「積極的なフィードバック」は、女性コーチとして歴代最多の勝利を収め、「成功したコーチングの模範者」と称され、Wooden と度々比較される、テネシー大学女子バスケットボールチームのヘッドコーチ Pat Summit (1952—) も同様の傾向を有していること(命令・指図48.1%, 称賛14.5%, 激励10.7%, 叱責・非難6.9%)が報告されている (Becker and Solomon, 2005). 転じて、これらのデータは、バスケットボールの本場であるアメリカの大学トップレベルといえども、競技者が「無知」であることを実証しているといえよう。

注11) バスケットボールを例に採ると、間欠的ハイパワー発揮能力は競技者にとって最も重要な身体能力であるが、この能力に大きくかわるエアロビックスパワーの指標である最大酸素摂取量は、1967年から1997年までの30年間で1.5倍も増加したことが明らかになっている (内山ほか, 2001). なお、同じバスケットボール競技の技や戦術行為の夥しい変化・発展については、内山 (2012) の言説を参照のこと。

注12) コーチングのメカニズムをこのように理解することは、本研究の緒言で提示した「コーチ」と「教師」の峻別という問題の解決にも自ずと繋がることになる。これまで明示しなかったが、「コーチ」と「教師」それぞれの目標は異なるのが当然なのである。わが国では、専門体育の体育過程を実践する場である部活動と普通体育の体育過程を実践する体育の授業とが混同され、実践上様々な混乱(あるいは好都合な事態)を招いているのも、「両者は全く別の実践形態をとられねばならない」(佐藤, 1993, p. 297) ことが看過されているか

らである。すなわち、「コーチ」は、当該スポーツ種目における複雑で高度で且つ特異な身体技法の獲得とその超越を可能にさせることで勝利を目指すのに対し、「教師」は、普通体育の過程、すなわち、運動文化を媒体にして新たな身体能力の顕現化を目指すのである。ただ、単元としての総時間数ばかりか1回の授業時間が限られている上に、専門的な実践者としての豊富な体験や経験がない種目も担当しなければならない「教師」は、自明のことではあるが、運動文化(スポーツ種目)に「教材化」を施さなければならない。この「教材化」、別言すれば、「教材研究」に全精力を投入し、上記目標を実現しようとするのが「教師」が専門職と呼ばれる所以であって、決して部活動にではない。「コーチ」と「教師」それぞれが独自の専門知識としての能力を有する専門職と見做される理由は、以上のことから明らかであろう。

注13) プラトンによる哲学者の規定をコーチへと援用することは、「イデアの純粹存在は、そのままわれわれのうちに見出されるのではなくて、抽象によって始めて捕捉されると言わなければならない」(田中, 1977a, p. 220)とか「イデアと個別的事象とは何の関係もない」(藤澤, 2000)という見解からすれば飛躍した論理であると訝られるかもしれない。しかし、「イデア」あるいは「真実在」へとさかのぼることは、哲学者のみに許される、あるいは哲学者だけが行えるわけではないであろう。いみじくも、田中は「かくてイデアの純粹存在は、論理上のアポリアーを解くためばかりでなく、いかに生きるかという、実際問題解決のためにも要請されなければならぬものであることが知られる。否、イデア思想成立の歴史においては、むしろこのような実践の動機を重要視しなければならない」(田中, 1977a, p. 233)と述べ、「わたしたちはプラトンと共に、真実在へとさかのぼり、これを根本原理として把握し、他のものもろの事物をこれから区別すると共に、またその類似性のよって来るところを、この原理によって理解することもできる」(田中, 1977b)ことを指摘している。それ故、ここではこれら言明に依拠することで、哲学者が解決すべき「いかに生きるか」は、コーチにおいては「いかに勝利を実現するか」という「実践的問題」として捉え得ると解釈している。先に、コーチは「哲学的」であらねばならないとしたのも、このことが前提に存していたのである。

注14) 「技術」や「戦術」の概念規定に際し、それら

名辞の多様な側面に対する、その定義も実に多様なものがある。しかし、それらの殆どに共通する見方も存在する。例えば、わが国の「技術論論争」でみられたように、技術を「労働手段の体系」や「生産物」と見做して物質的、実体的側面を強調しようが、「客観的法則性の意識的適用」(武谷, 1968)と定義づけて、その帰納的、主体的側面を強調しようと、何れにしても技術は様々な目的とは独立に規定し得る制作の手段にかかわることで共通している。つまり、「生成の原理」に支えられているのである。とすると、コーチが有すべき知識を特定するには、この「生成の原理」へと遡ることは必要不可欠な手続きであって、その場合、「卓越性」という人為的テクネーの対象にかかわって「身体を或る性質のものにすることができるとした、アリストテレスの「技術」にかかわる一連の言説にまずもって着目することは重要である。ここに引用した言説や「運動(生成)の原理は制作する者の内にあって、作られる事物の内には存しない、そしてその原理は或る技術またはその他のなんらかの能力である」(『形而上学』1064a11-12)といった言明からも窺えるように、「技術」は明らかに「生成の原理」に基づいているからである。要するに、アリストテレスにおいて、技術は、他のもののうちに運動を引き起こす原理であるとして、自身のうちに運動原理を持つ自然と区別されることで、「真なる分別の働きを伴う制作の性能と同一である」(『ニコマコス倫理学』1140a9-10)とされ、自然過程には存在しないものを作り出すという制作の地平において「正しくそれ(或るもの)を作り出すための制作手段の可否に関する」(括弧内は引用者)ところの「人間に固有の知的能力」(佐藤, 2011, p. 68)と捉えられているのである。また、「技術的所産(現実のもの)は、技術(制作)者が創り出そうとするものについてのイメージをどのように概念化(形相化)するかによって様々な形態における制作が可能となることや、制作するものと制作されるものとは常に『他在的』(ヘーゲル)であって、いわば制作過程における『原因と結果』とが実体的に別個のものとして離在することから、…何かを創り出すという目的が制作者の意図によって『外在的』となる」(内山, 2012, p. 40; 括弧内は引用者)、というその本質的特質は、「戦術」においても同様に諾われ得るのである。

文 献

- Abraham, F.A. and Collins, D. (1998) Examining and extending research in coach development. *Quest*, 50 (1): 59-79.
- アリストテレス：出 隆訳 (1968) 形而上学. アリストテレス全集12, 岩波書店：東京.
- アリストテレス：加藤信朗訳 (1973) ニコマコス倫理学. アリストテレス全集13, 岩波書店：東京.
- 朝岡正雄 (2011) ドイツ語圏における発展過程から見たコーチング学の今日的課題. *体育学研究*, 56: 1-18.
- Bales, J. (2007) The international council for coach education: connecting the world of coach education. *International Journal of Coaching Science*, 1(1): 87-95.
- Becker, A.J. and Solomon, G.B. (2005) Expectancy information and coach effectiveness in intercollegiate basketball. *The Sport Psychologist*, 19: 251-266.
- Becker, A.J. and Wrisberg, C.A. (2008) Effective coaching in action: observations of legendary collegiate basketball coach Pat summit. *The Sport Psychologist*, 22: 197-211.
- Breuer, C. (Ed.) (2009) Sport development report 2007 /8: analysis of the sports clubs' situation in Germany. Strauß: Köln.
- Cassidy, T., Jones, R. and Potrac, P. (2004) Understanding sports coaching. Routledge: London, p. 177.
- Chelladural, P. and Kuga, D.J. (1996) Teaching and coaching: group and task differences. *Quest*, 48(4): 470-485.
- Donovan, M. (1997) Role overload and role conflict—teacher or coach?: *British Journal of Physical Education*, 28(2): 17-20.
- Drewe, S.B. (2000) An examination of the relationship between coaching and teaching. *Quest*, 52(1), p. 83.
- Duffy, P., Crespo, M. and Petrovic, L. (2010) The European framework for recognition of coaching competence and qualifications-implications for the sport of athletics. *New studies in athletics*, 25(1): 27-41.
- Duffy, P., Hartley, H., Bales, J., Crespo, M., Dick, F., Vardhan, D., Nordmann, L. and Curado, J. (2011) Sport coaching as a 'profession': challenges and future directions. *International Journal of Coaching Science*, 5(2): 93-123.
- Entine, J. (2000) Taboo: why black athletes dominate sports and why we're afraid to talk about it. Public affairs: New York, p. 340.
- Esskinger, A.A. (1968) Certification for high school coaches. *Journal of Physical Education and Recreation*, 39(8): 42-45.
- European Coaching Council (2007) Review of the EU 5-level structure for the recognition of coaching competence and qualifications. *European Network of Sports Science, Education and Employment: Köln*, p. 5.
- Figone, A. (1994) Teacher-coach role conflict: its impact on students and student-athletes. *The Physical Educator*, 51: 29-34.
- Freischlag, J. (1985) Team dynamics: implications for coaching. *Journal of Physical Education Recreation and Dance*, 56(9): 67-71.
- Frost, R.B. (1966) Professional preparation: certification of coaches. *Journal of Physical Education and Recreation*, 37(4): 77-80.
- 藤澤令夫 (2000) プラトンのイデア論の用語について. 藤澤令夫著作集第Ⅱ巻. 岩波書店：東京, p. 126.
- Gilbert, W.D. and Trudel, P. (2004) Analysis of coaching science research published from 1970-2001. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 75(4): 388-399.
- Gould, D., Krane, V., Giannini, J. and Hodge, K. (1990) Educational needs of elite U.S. national team, pan american, and olympic coaches. *Journal of Teaching in Physical Education*, 9: 332.
- Grint, K. (2000) The arts of leadership. Oxford University Press: Oxford, p. 4.
- Haag, H. (1994) State-of-the-art review of sport pedagogy. *Sport Science Review*, 3: 8.
- Hackman, J.R. (2002) Leading teams: setting the stage for great performance. Harvard Business School Press: New York, pp. 192-193.
- Hastie, P.A. (1992) Towards a pedagogy of sports coaching: research directions for the 1990's. *International Journal of Physical Education*, 29(3): 26.
- ヘーゲル：長谷川宏訳 (1998) 精神現象学. 作品社：東京, p. 5. <Hegel. G.W.F. (1907) *Phänomenologie des Geistes*. A. H. Adriani: Berlin, S.4.>
- 樋口 聡 (1987) スポーツの美学. 不昧堂出版：東京.
- 樋口 聡 (1993) スポーツ美と勝敗あるいは美しいゲームについて. 中村敏雄編, スポーツのルール・技術・記録. 創文企画：東京, pp. 11-37.
- 廣松 渉 (1982) 存在と構造. 岩波書店：東京, p. 265.
- Jackson, P. and Delehanty, H. (1995) Sacred hoops: spiritual lessons of a hardwood warrior. Hyperion:

- New York.
- Jones, M.B. (1974) Regressing group on individual effectiveness. *Organizational Behavior and Human Performance*, 11: 426.
- Jones, R.L, Armour, K.M. and Potrac, P. (2002) Understanding the coaching process: a framework for social analysis. *Quest*, 54(1): 43.
- Jones, R., Armour, K.M. and Potrac, P. (2003) Constructing expert knowledge: a case study of a top-level professional soccer coach. *Sport, Education and Society*, 8(2): 213-229.
- 河本英夫 (2002) メタモルフォーゼ オートポイエーシスの核心. 青土社: 東京, p. 11.
- 久保正秋 (1998) コーチング論序説—運動部活動における「指導」概念の研究—. 不昧堂出版: 東京.
- Lyle, J. (2002) Sport coaching concepts: a framework for coaches' behavior. Routledge: London.
- Lyle, J. and Cushion, C. (Eds.) (2010) Sport coaching: professionalization and practice. Churchill Livingstone Elsevier: Edinburgh.
- Lynch, J. (2001) Creative coaching. *Human Kinetics: Illinois*, p. 123.
- Malloy, D.C. and Rossow-Kimball, B. (2007) The philosopher-as-therapist: the noble coach and self-awareness. *Quest*, 59(5): 311-322.
- Mckinney, W.C. (1970) Certification of coach: the Missouri approach. *Journal of Physical Education and Recreation*, 41(8): 50-51, 56.
- メルロ＝ポンティ: 竹内芳郎・小木貞孝訳 (1967) 知覚の現象学. 1. みすず書房: 東京, p. 14.
- 文部科学省 (2012) スポーツ基本計画. p. 37. http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/index.htm
- Murray, J.A.H., Bradley, H., craigie, W.A. and Onions, C.T. (1961) *The Oxford English Dictionary*. Volume II, C. Clarendon Press: Oxford, pp. 544-545.
- Nash, C.S., Sproule, J. and Horton, P. (2008) Sport coaches' perceived role frames and philosophies. *International Journal of Sports Science and Coaching*, 34: 539-554.
- 西部 邁 (2002) 知性の構造. ハルキ文庫: 東京, p. 213.
- Nordmann, L. and Sandner, H. (2009) The diploma coaches study at the Coaches Academy Cologune of the German Olympic Sport Federation—current state and new developments. *International Journal of Coaching Science*, 3(1): 69-80.
- North, J. (2009) The UK coaching workforce. *Sport coach UK*: Leeds.
- Nye, J.S. (2008) *The powers to lead*. Oxford University Press: Oxford.
- Onions, C.T. (Ed.) (1966) *The oxford dictionary of english etymology*. Clarendon Press: Oxford, p. 184.
- プラトン: 田中美知太郎・藤澤令夫訳 (1976) 国家. プラトン全集11. 岩波書店: 東京.
- Potrac, P., Brewer, C., Jones, R., Armour, K. and Hoff, J. (2000) Toward an holistic understanding of the coaching process. *Quest*, 52(2): 186-199.
- 佐藤臣彦 (1993) 身体教育を哲学する—体育哲学叙説—. 北樹出版: 東京.
- 佐藤臣彦 (2011) コーチングの哲学. 2011 *Philosophical Exploration of Sport and Dance*, pp. 59-73.
- Silva, J.M. (1984) The status of sport psychology. *Journal of Physical Education, Recreation and Dance*, 55(7): 48.
- 武谷三男 (1968) 弁証法の諸問題. 武谷三男著作集第1巻, 勁草書房: 東京, p. 7.
- 田中美知太郎 (1977a) イデア. 田中美知太郎全集第1巻, 第2刷. 筑摩書房: 東京.
- 田中美知太郎 (1977b) 哲学初歩. 改訂第1刷. 岩波書店: 東京, pp. 24-25.
- Taylor, B. and Garret, D. (2010) The professionalization of sport coaching: definitions, challenges and critique. In: Lyle, J. and Cushion, C. (Eds.) *Sport coaching: professionalization and practice*, Churchill Livingstone Elsevier: Edinburgh, pp. 99-117.
- Tharp, R.G. and Gallimore, R. (1976) What a coach can teach a teacher. *Psychology Today*, 9: 75-78.
- Uchiyama, H. (2002) A study on the curriculum for coaching basketball team in Japan. *Japan Journal of Sport Coaching*, 1(1): 13.
- 内山治樹 (2009a) バスケットボールの競技特性に関する一考察: 運動形態に着目した差異論的アプローチ. *体育学研究*, 54(1): 37.
- 内山治樹 (2009b) 競技力の概念把握への方法序説. *体育学研究*, 54(1): 161-181.
- 内山治樹 (2012) バスケットボールにおけるルールの存在論的構造: 競技力を構成する知的契機としての射程から. 筑波大学体育科学系紀要, 35: 27-49.
- 内山治樹・坂井和明・武井光彦 (2001) エリート女子バスケットボールプレイヤーが獲得すべきエアロビックパワーの目標値決定に向けたマルチステージ20m シャトルランテストの検討. 筑波大学運動学研究, 17: 17-27.
- ウェーバー: 尾高邦雄訳 (1983), 職業としての学問.

第48刷. 岩波書店: 東京. <Weber, M. (1917) Wissenschaft als Beruf. In: Mommsen, W.J. und Schluchter, W. (hrsg.) Max Weber Gesamtausgabe. Abt. 1: Schriften und Reden, Bd. 17, Mohr: Tübingen, S.70-111.>

Wittgenstein, L. (1958) Philosophical investigations. Macmillan: New York, p. 54.

Wooden, J.R. (1999) Practical modern basketball (3rd ed.). Allyn and Bacon: Massachusetts.

図子浩二 (2012) 体育方法学研究およびコーチング学研究が目指す研究のすがた. コーチング学研究, 25 (2): 203.

(平成24年12月5日受付)
(平成25年10月1日受理)

Advance Publication by J-STAGE
Published online 2013/11/29